

芋粥 露青

虚脱感を纏った同じ旋律が、長い間幾度も幾度も幾度も幾度も幾度も繰り返されている。初めはみずみずしい衝撃に満ちていたその音も、だんだんと反復の波間にとけだしてほぐされていき、それぞれの繋ぎ目は既に見えなくなってしまう。今や私の耳には飽きも失望もなく、ただ機械的に繰り返される電子音に呑まれたまま頭を前後に振っている。手元には前衛的な小説が一冊開かれているが、私の眼差しはそこに印字された文字をひしゃげたインクの染みとしか認知していない。ただ時折どろどろになった音の海から、質の悪いラジオ音声のような顆粒状の人の声が聞こえてくると、静止していた脳みそが一字一字を素早く絡め取って、私の口がそれを復唱する。異国人らしい男の声は一定間隔ごとに「ジコラツツシム」や「リセイテキコウドウ」といった角張った日本語をなぞっていた。滑らかに発音をしようとするに努めていることがかえって異質感を際立たせており、彼が駆け足で声を発するたびにしこりのようなものが鼓膜に残る。だがこの奇妙な言葉のひずみが、聴いているうちに愛おしくなってきたのか、ひたすらに反復される旋律のなかに潜り込みながら私は、異邦人の背伸びした口遊びを待ち構えていた。そのうちずっと同じものであるはずの電子音にも段々と厚みが出てきて、更に細やかな音へと分裂していく。私の頭は振動する速度を上げた。うなじと咽喉元の部分が気触れたみたいに熱くなるが、純粹な運動と化した肉体は止まることなくどんだん音の塊に馴化していくようで、いよいよ周囲の世界までもがやわらかい構造になって、明瞭な境目を失う。時間も空間も思考も体軀も書物も音楽もすべてが白砂の如くさらさらと崩れていくなかで、私が感じたのは恐怖ではなく新たな創造への恍惚だった。あらゆる固形物がクリーム状になっ

た今、次に待ち受けるものは「生成」に違いあるまい。不定形の塊からより高次元の定形物が立ち現われるその瞬間に私は死ぬかもしれないが、それでも悔いはなかった。創出という革命的運動の一部になれるのであれば、私の皮膚を埋め尽くす表現への欲求は永久に満たされるからである――。

と、そのとき突然うなじの部分から亀裂が入った。枯れた小枝を数本踏み折ったような、あつけない音が狭い部屋じゅうに反響して、首の裂け目が見えるうちに広がっていく。戸惑いの叫びを発する間もなく、私の頭部は胴体から抜け落ちて、硝子板の嵌まったテーブルの上にごろりと転がった。

一瞬の出来事に錯乱した私は目まぐるしく動く瞳の焦点を無理に合わせながら、ひとまず傷口の状態を確かめようと胴体の方を眼差すと、首元の肉の繊維がほつれた維管束のようにささくれているのがはっきりと視認できる。不思議と血液は一滴も垂れてはおらず、傷口の断面もあまりグロテスクではない、黒単色で塗りつぶされている。そもそも首と胴が分裂したというのに生きているということがまず何よりも驚くべきことではないか。

さっきまでひとつに融けあっていた周りの風景だが、今では薄気味悪いブロックの集積となってしまうて、そのすべてが私の手によって触れられたいと主張している。心地よい夢想から乱暴に呼び醒まされて、しばらく呆然としていた私だったが、徐々に状況が呑み込めてくると同時に、今度は変わり果てたわが身への悲嘆と未来への恐れが濁流のように注ぎ込み、私をもみくちゃにした。いくら感染症による外出規制期間だとはいえ、いつかは終末が訪れ、また普段通りの学生生活が始まる。だが、こんな異形の姿になってしまつては、待ち焦がれ続けた

「日常」から永久に追放されてしまったも同然ではあるまいか。大学生としてのひとときばかりではない、この先の長い社会生活全体にあらゆる齟齬が生じてしまう。

兎に角この姿を他人に見られてはまずい。それ以前に両親にどう説明したらよいだろうか？友人たちに連絡は？今この時、この瞬間に何をすべきなのか？悩み事はあらゆるところから湧いて出てくるようだった。

焦燥に汗みどろになった私の耳には相変わらず電子音が流れていたが、おぞましい出来事に追い詰められている私にとって、ひたすら繰り返される旋律は今や吐き気を催す不協和音でしかなかった。

一定間隔をあけて鼓膜に馴染んだあの異国人の音が挟み込まれる。

「ジコリスル」

「リセイテキコウドウ」

その、人を小馬鹿にしたようなもたつき加減にだんだん苛々し始めた私は音源のスイッチを切ろうとラジカセの方へ向き直ったが、肝心の手ももう存在しないことに気づき、底のみえない哀しみが鼻腔を衝いた。粘り気をもった塩からい汗に雑じって無味無臭の涙が硝子板の上に滴る。慟哭しようと唇を開いたが、あまりの懊悩の末に思考がこんがらがってしまったからか、思うように声が出せない。ぱくぱくと開け閉めを繰り返す口からは、ただすさまじい風のような掠れた音が漏れるばかりである。その音のふがいなさに涙はどんどん滴った……。

暗澹たる現実を突きつけられてすっかり混乱してしまった頭部とは対照的に、胴体はすっかり落ち着きを取り戻しており、ある種の諦観的な楽観主義に笑い転がっている。

た。頭部が間の抜けた音を漏らすたび、細胞の中で愉快さが膨張して破裂しそうだと言わんばかりに足をどたどたと鳴らし肉を震わせた。

部屋の窓からは真っ赤な夕陽が何かを祝福するようにどろりと差し込んで、電子音はまた幾度も幾度も幾度も幾度も同じ旋律を反復する。

頭部が弱々しくテーブルの上を這いずり回るなかで、前衛的な小説を手にとった胴体は、形而上絵画のような小説を書くにはどうしたらいいのかについてじっくりと考え始めていた。